

# 聖光の著作に見られる『大乘無量寿莊嚴經』について

郡 嶋 昭 示

## 一、はじめに

『大乘無量寿莊嚴經』（以下『莊嚴經』）は、宋代（九九一年）に法賢によって訳出された『仏説無量寿經』の異訳とされる典籍であり、現存する『無量寿經』諸異本の中でも最も新しい訳出であるとされている。この典籍が日本に伝来した時期についてはこれまであまり指摘された例はみられない。しかし、法然の門弟の一人である聖光房弁長（一二六二—一二三八、以下聖光）の『浄土宗要集』（以下『西宗要』）には、この『莊嚴經』を被閲したという記載があり、さらにその他の著作においてもその記載内容に言及する部分を確認できるのである。従って本稿では、聖光による『莊嚴經』の取り扱い方の整理から、聖光の新出典籍を扱う姿勢や、また聖光の著作内における『莊嚴經』の扱い方を中心とした、聖光の思想的変遷について指摘したいと思う。

## 二、末書及び先学の研究

『莊嚴經』に関する研究は諸先学によって多くの研究成果が報告されているが、日本への伝来や、日本仏敎における受容に関してはあまり言及されてはいない。このようなことに言及された研究をみると、まず、聖光の著作の末書である妙瑞の『徹選択集私志記』（以下『私志記』）巻中において、「大乘莊嚴經は是れ上人の所覧に非ず。此の時に流布せず。」<sup>1</sup>と云って、法然在世当時は『莊嚴經』が流布してはおらず、法然は見る事ができなかったと指摘している。また、稻城選恵氏『無量寿經訳経史の研究』によると、一切経としてまとまった形では、高麗版に収録されたのが初めてであり、高麗版の完成が一二五一年であるとされることから、親鸞の八〇歳以降の開版で、親鸞は『莊嚴經』に接することが出来なかったのではないかとしている。<sup>2</sup>さらに付け加えると、稻城氏は「宋訳莊嚴經はA、D九九一年法賢によって訳されたもの

が出来ないようである。

### 三、聖光の著作における用例

『莊嚴經』に関する記載は、『西宗要』に三箇所と『徹選択本願念仏集』（以下『徹選択』）に一箇所取り上げられているのが確認できる。まずはそれぞれの用例を整理したい。

①『西宗要』「第一、浄土三部経事」の最後の問答において、問、大乘莊嚴經ハ、是レ双巻経ノ同本異訳也。何ッ善導引レテ之、ヤ釈セ浄土宗ヲ乎。  
答、新訳ノ経ナルカ故、善導ハ不レ見給ハ也。故ニ不レ引レ之ヲ也<sup>⑤</sup>。

といい、善導が『莊嚴經』を用いなかっただのは、この經典が新しい訳であったために善導は被閲することができなかったためであると答えている。つまり善導教学の形成に『莊嚴經』の説示は影響していないことを聖光は指摘したかったのであろう。

②『西宗要』「第六、浄土本経証誠事」所説の諸仏証誠に関する説示の中で、『無量寿経』『觀經』『阿弥陀経』の三経は全て六方恒沙の諸仏によって証誠されているのかどうかという問答を行い、三経全て証誠されるものであると答える中で、

弁阿西国<sup>二</sup>下リ、諸ノ経蔵ヲ尋ルニ、ムナカタノ社ノ一切経蔵ニッ、大乘莊嚴經ヲ勘ルニ、其ノ中巻ニ、十方恒沙ノ諸仏出ッ広長ノ舌相一証誠

であるが、我が国では恰も源信和尚の時代である。高麗版の完成までに一六〇年あるから、既に中国より直接將來されてきたかもしれないが、大藏經としては高麗版に初めて出ている。」とし、高麗版の伝来以前に『莊嚴經』が日本に流伝していた可能性を指摘しているが、具体的に確認できる例は取り上げられていない。しかし、高麗版の伝来以前に『莊嚴經』が伝来していたかどうかという点に関しては、今回取り上げるように聖光が被閲したという記載があり、また先に挙げた妙瑞の『私志記』の文においても『西宗要』の記載を引用して「今師始めて筑前の国宗像の社に於て此の經を見ることを得たり」として聖光が高麗版伝来以前に被閲したことを指摘している。また、『莊嚴經』という典籍が存在し、またこの典籍が『無量寿経』の異訳であるということは、『竜舒浄土文』<sup>③</sup>や宗暁『楽邦文類』<sup>④</sup>等の典籍に記されており、これらの典籍の伝来によって、『莊嚴經』という典籍が存在することを確認することはできたようである。いずれにせよ、これらの先行研究を見ると、伝来は確実なところでは高麗版の伝来時であり、法然・親鸞共に『莊嚴經』を全巻通して被閲したことはないということになっているようである。また、聖光が『莊嚴經』を宗像神社の一切經において被閲したことに關しては妙瑞が同じく『私志記』において指摘しているが、その後聖光による『莊嚴經』の扱いに關して言及した論文は見るこ

聖光の著作に見られる『大乘無量寿莊嚴經』について（郡嶋）

シ玉ヲ文明カニ有レ之。<sup>(6)</sup>

といつて、聖光が九州の諸々の一切経蔵を訪ねた際に、宗像の社の一切経蔵において『莊嚴經』を被閲し、『莊嚴經』の中巻に諸仏証誠の文が確認できたことを指摘し、経証としているのが確認できる。

③『西宗要』「第七十、四十八願事」の説示において、『無量寿經』と『大阿弥陀經』『平等覺經』の願数の違いについて、

二十四願ハ者、訳者ノ略歟、又大乗莊嚴經ニハ、三十五願ヲ説ケリ、又群疑論第二ニハ、薬師ノ十二願ヲ加ヘテ弥陀モ薬師モ六十願ナルヘシト云ヒ、是ヲ難ソ云フ。

といい、二十四願は訳者が四十八願を省略したものであると推察し、さらに、『莊嚴經』は三十五願であり、『群疑論』には薬師如来の十二願を加えて六十願であると説かれていることを取り上げて、翻訳者の省略であるとする説だけでは問題が残ることを指摘しているように受け取られる。この本願の数が翻訳者の省略であるという説は、既に『楽邦文類』<sup>(8)</sup>において提唱されており、この説への再考を促しているようにも受け取られる。また、ここで問題となることは、『莊嚴經』の説示が三十五願であるとしていることである。現在に伝わる『莊嚴經』は三十六願であることから、一願少ないことになるのである。このことに関しては別の機会に検討したい。

④『徹選択』では、上巻の『選択集』第十四章段に対する説示において『莊嚴經』が取り上げられている。まず、

問、如<sup>式</sup>大乘莊嚴功德經ノ、明<sup>三</sup>諸仏ノ証誠ヲ、念仏余善俱ニ証<sup>二</sup>誠<sup>一</sup>之ヲ如何<sup>三</sup>。

として、第一問答において『莊嚴經』には念仏・余善共に諸仏が証誠していると指摘し、念仏のみを証誠とした『選択集』の説と相反してしまうことを指摘している。これに対して、この問題を解釈するには二つの考え方があり、二つ目の説において、『莊嚴經』では余行も証誠されてはいるが、この経の本意は念仏に限って諸仏に証誠されているのであるとして取り上げている。このように、新たに伝わった典籍によって新たな問題が発見されたときに、聖光は私見をもって対応を試みているのがわかるが、その他の詳細な検討は行っていないようである。

#### 四、『莊嚴經』を扱う姿勢

以上の用例から考えると、自説の経証として『莊嚴經』を使用している部分が確認できるが、いずれも最後の問答において紹介するに止めていることが指摘でき、このことから考えると、『莊嚴經』の使用に関しては慎重であり、やはり経証とするには注意を要する典籍であることを意識していたと考えられる。また、『莊嚴經』の記載内容において新たな問

題が発見された場合は積極的に問題提起を行う姿勢が見られる。

また、このように『莊嚴經』に関する指摘を行うのが、聖光最晩年成立とされる二典籍であるという点も見過ごすことはできない。このことに関して、『西宗要』以前に成立したと考えられるほかの典籍を見ると、『浄土宗名目問答』(以下『名目問答』)<sup>(10)</sup>に所依の經典が浄土三部經であることが説示され、さらに『阿弥陀經』所説の諸仏証誠についても言及されているが、『莊嚴經』に関する指摘はされていない。その他の著作においては、諸仏の証誠に関する説示が見られないようである。つまり、このことから考えると、それぞれの著作の目的から、その時々にとこまで言及する必要がなかったということもあるだろうが、その時期までに『莊嚴經』を被閲していなかったか、または『莊嚴經』に関する問題意識が深まっていなかったのではないかと考えるのである。さらに、『西宗要』と『徹選択』の二典籍に限って見るならば、『莊嚴經』に関する最も具体的な問題提起が『徹選択』において行われているということから考えると、恐らく他者が『莊嚴經』所説の余行証誠について指摘したか、または聖光が『莊嚴經』被閲の際にこの問題に気付いてはいたものの、自らの答えが曖昧で定まらないため『西宗要』では説示を避け、『徹選択』に至って自分なりの回答が定まったために説示をするに至っ

聖光の著作に見られる『大乘無量寿莊嚴經』について(郡嶋)

たのではないかと考えるのである。

## 五、おわりに

以上、聖光による『莊嚴經』の扱いについて、その用例の整理から新出典籍の扱い方と、『莊嚴經』の扱いから見る思想的な流れについて指摘を行ってきた。今回は『西宗要』と『徹選択』のみに用例が見られることから、この二つの典籍を中心に検討を行ったが、この二つの典籍は、今回指摘したように他の典籍には見られない説示が行われていることが特徴的である。従って『西宗要』と『徹選択』は聖光の著作の中でも特別な性格を有する典籍であるといえるのかもしれない。

- 1 『浄全』八・一七四頁・上(元漢文)
- 2 稻城蓮恵氏『無量寿經訳経史の研究』(一九七八年)・六五頁
- 3 『浄全』六・八四五頁・下
- 4 『浄全』六・九二四頁・下
- 5 『浄全』一〇・一三七頁・上
- 6 『浄全』一〇・一五二頁・上
- 7 『浄全』一〇・二三一頁・上
- 8 『浄全』六・九二四頁・下
- 9 『浄全』七・九一頁・下
- 10 『浄全』一〇・三九八頁・下

(キーワード) 聖光、浄土宗要集、徹選択本願念仏集、大乘無量寿莊嚴經

(大正大学博士課程)

*Jushuin Gimonshō* (決答授手印疑問抄). Hōnen, Shōkō (聖光), and subsequently Ryōchu, throughout their lives held a relative, not an absolute, standpoint. The typical explanation of this standpoint is just a metaphor of two rivers and a white path (*niga-byakudō* 二河白道), and we must try to understand the three thoughts (*sanjin* 三心) through this metaphor.

### 33. On the *Dacheng wuliangshou zhuangyan jing* 大乘無量壽莊嚴經 in Shōko's Works

Shōji GUNJIMA

The *Dacheng wuliangshou zhuangyan jing* 大乘無量壽莊嚴經 (*Zhuangyan jing* 莊嚴經) was translated in the Song period as another version of the *Wuliangshou jing* 無量壽經. No one has explained when this text was imported into Japan. Shōko noted in one of his works that he saw a copy of the *Zhuangyan jing* at the Munakata shrine. So we know that the *Zhuangyan jing* was imported before the Koryō printed version. Shōko quoted this text in his *Jōdoshū yōshū* (*Seijūyō*) and *Tetsu senchaku hongan nenbutushū* (*Tetsusen-chaku*). Therefore, we know that Shōko made a careful reading of the *Zhuangyan jing* and tried to resolve the difficult points of the original text. Shōko's works, *Seijūyō* and *Tetsu senchaku*, that quoted the *Zhuangyan jing* were written in his later years. The most explicit details were expounded in the *Tetsu senchaku*. I believe Shōko's thought changed from the *Seijūyō* to the *Tetsu senchaku*.

### 34. Yūkai's View of *Bonnō-soku-bodai*

Mayuri RINZAN

In this article, I examine how Yūkai understood the concept of *bonnō-soku-bodai* (*kleśa* or afflictions are the same as *bodhi* or enlightenment). Yūkai (1345-1416) was a Muromachi era scholar-monk of the Shingon School. In his first work, the *Hōkyōshō*, he criticized the heretical Tachikawa Sect emphasizing their misunderstanding of *bonnō-soku-bodai*. In his treatise, the *bon-*